

371

口 岸澤 三八

三歳の暮年 天保四年二月市村謹以五在式佐ノ上調子 飯田町に住む
熊谷以行き 三生翁と號す 死す

372

口 二代 佐々木 五郎

豊中

萬延元年二月守田庵南、麻紋番附上調子通名に佐々木名正見の
案可いゆ人。改名可矣丁外と不詳矣。文久三年三月移上京。明治三年
豊中→改り名

373

口 初代 岸澤 式松

豊中

猿若門三日茶庵廟庵重兵衛と云う。嘉永四年改がる上調子格。中央
省略。列之了の字政二年より上調子格と有る。芳井之四代目吉武部少
輔。義之の同人伴巳佐吉。られて之時仁義斎子少輔の恩師の一程と云ふ。
萬延五年分裂際双方へ義理立たず。庵業也。

374

口 常磐石津文中

松井齋文中

文久三年正月市村謹以豐佐大孫のタニ三味線を勤む
二九文中に豊佐大孫の寢子左六文中有りや不詳。後考を待て
文久三年正月中市村謹以松井齋文中を改む

375

口 佐々木 市二

文久三年正月市村謹以文中上調子

376

◎常磐津芝江

後三代目九藏 又云芝紅音 (天保十二年始)

本名田中鉄藏、四女組太夫の芝紅音の次子で高砂の三味線彈手。文政二年正月市村座に移籍、文中の上調子、牛乃文字太衛三重郎に添て上調子を勤め度合年間五月中村座にて來ゆる。年三十五歳。

九藏は不更に明治十年改ひる二番芝紅音と云ふ。明治十三年十一月十四日破笠高輪諭誠手に奉了。法子を誠心院諭通と云う。享年三十九才。めだち有り。以九藏と云う。座敷向う三味線で可衣由。

377

◎初代常磐津文字兵衛

初め八野太夫、八十松、後文佐 (天保十一年始)

越後生れ親は鍋冶彦。本名と高砂文字兵衛と云う。

文政三年五月六日市村座に文字太夫(五代目壽元)の立三味線として文左衛門と共に番附に出で、南鍋冶所に住む。明治三十一年一月十四日破。六十七才。

○第三太夫談。昔よりの意地が悪くて仲向の風度はあまりよくなかれ。

晩年中風を發し。

○林中来人談。始々八野太夫と云ふ。声が大きくて三味線彈きとく。八十松と改めが万延元年常磐津岸辺家より文字兵衛と改名し、文字の弟子である。

378

◎常磐津文字助

初代八百人 (文政一明治十)

文政二年の歲旦本からその名見ゆ。文字の弟子で岸辺分離の時文字助と改め上調子格となり。萬延元年二月林中堂に文左衛門の上調子とて始まる出勤。文政二年九月市村座に文字太夫(五代目壽元)の立三味線勤務も。二代目文字兵衛の父。明治十一年七月改めて享年三十九才。意地が悪くて尋ねた。

379

同常磐津三重節

亦曰岸澤三重節

三藏弟子で初名を岸次三重節と云う。安政三年歳旦本達名中以上調子格來席
 に名を切りて國中一派岸澤分離。常磐津は孫う上調子格へ追ひ、天治元年
 一月中村慶に常磐津吉事太夫ヲテモ拂ひ。慶応乙年歲旦本以三倍格。
 記載あるも同年の日付は不詳。天平中祇園の思ひ出。而國に住む(大野の由)
 ○林中未と人送ふ小川アラカリヒル咲焉トハ三味線である。

380 □ 岸澤竹藏

慶応三年二月守田慶久仲助上調子

381

◎五代目岸澤式佐 挑戸仲助 挑戸四代目古部 (文化三—慶応二)

四代目式佐・寅子孫。文化三年新吉原揚遣母に生子。通称仲助と云う
 文政五年十一月森田慶に嫁りて其勤右和佐の上調子を勤め同年正月市
 村屋の文子大夫(四女)孫の少三味絆に生女。翌八年正月中村慶へ
 五代目式佐を襲名。爾後四代目常磐津源元と携手し斯界の名人と
 稱せられ嘉永六年正月市守慶に四代目古部とす。
 嘉永三年十二月芸道のゆき常磐津源元と弟の正生と双方が奉行所
 へ前一士で一か奉行の説教によりて常磐津と分離。(爾後おお岸澤)
 の一派を立て自ら陣頭に立ち文久三年正月守田慶に寅子六代目式佐の
 結婚にタチを譲りし沿革、常磐津は對抗して一芸屋に去勤せしもの
 嘉永三年十二月十九日致可。享和二年正月「元治三年竹遊者」と云

その代表作曲は、宗清(文政二)おのと兵衛(天保元)千萬歳(天保二)將門(天保二)
 五人龍(天保二)新うづ(天保二)お(ま)(天保二)小(な)な(弘化二)じく(弘化二)
 経営(弘化二)新うづ(天保二)三世相(文政四)貢十人切、少夜衣千太郎(文政二)

382

口三代目 岸澤金藏 初勝蔵 (365=1)

初妻和佐太夫の件 神田に在住

383

口六代目 岸澤式佐 初父己佐吉、後五代目 古式部 (云保四明治三丁)

五代目式佐の実子として己佐吉と称す。天保四年岸澤草堂の出生。弘化三年二月

市打屋にて西入へ始まる父式佐(上調子)の勤(徳嘉永四年三絃松と有る)。

安政四年正月六代目式佐(前記)三味線松と有る。岸澤の勤(徳嘉永四年三絃松と有る)。

父四五吉式部改名は弟仲助と若く常磐岩津にて立つ。明治丁巳年十月

五十歳常磐岩津と和子を同土月新富庵狂言以小文字太夫の子三味線古

勤(徳嘉永四年三味線古勤)。明治三十一年(六一才)養子子三代目

己佐吉に式佐を譲りて五代目古式部とす。五度引退。向も古と明治

三十一年二月三十六日病歿。享年六十九才

伯父立代目式佐(長男)て次男は神田錦町の正本向尾伊賀屋勘右衛門

へ入籍。其子行綱(三女)嫁給され。三男は三代目仲助で末子の正子

おいては古式と名乗つて師匠とする。

松島(三保松)の房構(作曲家)、角田(鈴木)の物語(太田道灌)、
「安樂印」(伏見)

384

口七代目 岸澤式佐 初父己佐吉(安政二年)、後七代目 古式部

安政二年市打屋に生る。常磐岩津式喜太夫の孫。父は幼少の折病没十九才

ま。祖父以前で未だ記載なし。岸澤山佐(子)が七代目式佐の養子となる。

二代目己佐吉と称す。明治二年七代目式佐と相続。然るに同四年常磐

津家(舟川向幕)が起る分離。新派と称す。大正十年七月七代目古式部と

改名。古式部(名はこれより先叔父三代目仲助の竹道から)。古式部(名はこの

ある故)と六代目へれ。自分は七代目となる。

△三人牛輪(うしのわ) 大森彦之